

令和5(2023)年度 三河港コンテナ物流他 将来性検討調査業務 実施概要 (三河港振興会 委託事業)

1. 業務の目的

三河港は、輸入自動車の金額及び台数ともに31年連続日本一である完成自動車を太宗貨物とする他、コンテナターミナルを有し、貿易額において国内でも有数の港湾であり、その競争力を維持・強化するには、港湾物流の更なる効率化を図ることが必要である。本業務では、三河港後背地域の荷主企業・港運事業者等における物流の実態及び動向を把握し、近年、三河港でコンテナ貨物量が減少した分析を行い、その課題について整理した。あわせて、三河港の現況・将来動向により、今後の取扱貨物の可能性について検討を行うとともに、三河港の将来的な構想を検討するための基礎資料をとりまとめた。

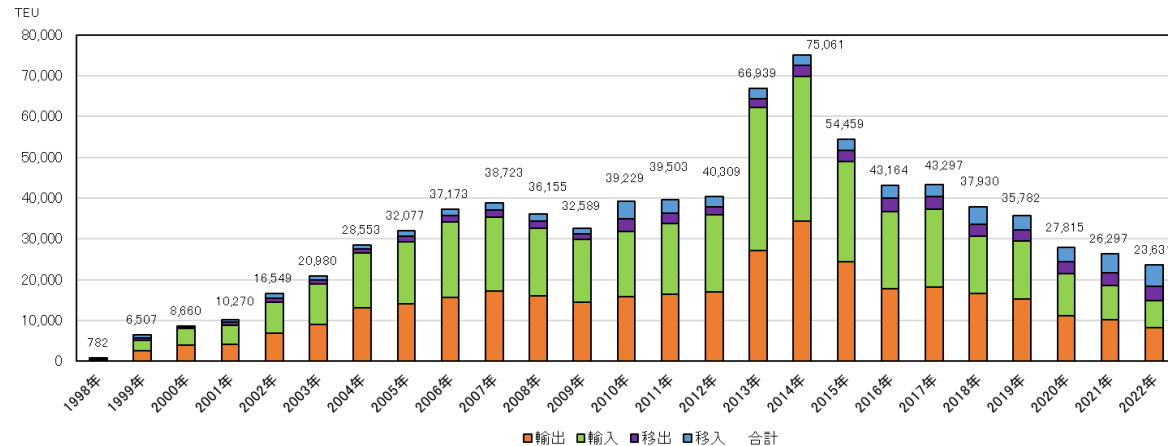
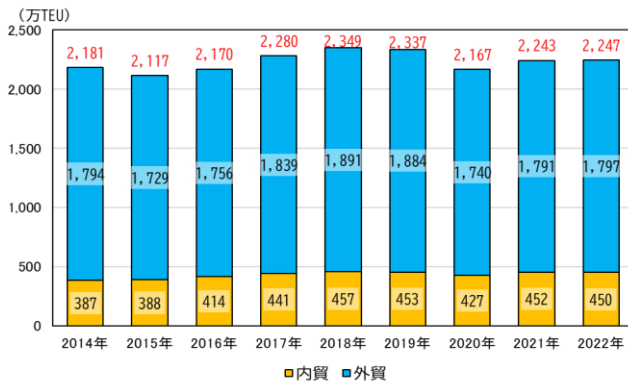
(1) 三河港地域の経済・社会情勢の分析

三河港および後背地域の産業経済に関する動向や将来動向、三河港の貨物流動状況について既往報告書や統計資料等を基に実態調査を行い、三河港の課題を抽出するための情報を収集した。

(2) 三河港地域に立地する企業動向の実態把握

コンテナ関連貨物や完成自動車、環境・循環産業など貨物種別に企業ヒアリング調査等を行い、企業動向を把握し、三河港の課題を抽出するための情報を収集した。

2. 調査結果(一部抜粋)



■国内のコンテナ取扱量

国内のコンテナ取扱量は、新型コロナウイルス感染症の拡大以降最も影響の大きかった2020年は2,167万TEUで減少し、2021年には2,243万TEUと回復基調にあったが、2022年は2,247万TEUで2021年比横ばいであった。コロナ禍前の水準には戻っていない。

■三河港コンテナ貨物取扱量の推移

三河港のコンテナ貨物取扱量は、2014年の75,061TEUをピークに減少傾向にある。2014年にはロシア向けの自動車部品の取扱が年間約3万TEUあったため取扱貨物量がピークを迎え、その後ロシア航路の廃止や中国・ベトナム航路の停止、新型コロナウイルス感染症、物価高の影響等を受けて減少を続け、2022年には23,631TEUでピーク時の31.5%程度となった。国内の貨物量がコロナ禍以降回復基調であるのに対し、三河港では減少が続いている。